

9 (1991年4月～1993年3月)

人間関係原論 授業記録

〈第三グループの1〉

まどか 蛭 田 庸 代 (南山短期大学助教授)

〈この二年間の目標〉

人間関係(科)の学び方を学ぶ

体験学習を体験する

学習研究共同体(スタッフ学生関係 新たな教師学生関係)の模索

各個人 及び 人間関係科研究学習共同体としての「人間関係の原論」づくり

〈ひとからの出発〉

ここでの原論スタッフチームの特徴は、

- 1) 構成スタッフ4名の学際的試みを「人間関係原論研究チーム(学生と共に)」として行ってみようという意気込みでスタートをきったこと。
- 2) 人間関係および人間関係科での学び方を学ぶ〈体験学習法〉の実習中心プログラム。
- 3) 一つの学年全員という大人数規模の学習共同社会(体)づくりと、同時に、教員スタッフ学生協働の研究共同体のシステムの模索。
という姿勢にあった。

その研究テーマは、「人間関係の原論」を、単に理論的学習でなく体験学習法のグループワークを毎回実施しながら、2年に渡り、グループのコミュニティの実感、約100人とのコミュニケーション、グループや自己のプロセスに気づく力等を積み重ねつつ、グループ全体レベルと個人レベルとで互いを知り合っていくことにある。

<クラス構成>

場所：南山短大21番教室（絨毯敷き 約120畳）

全員約120名が集合して毎回授業を展開する。

時間：一年次 1991.4.11-1992.1.23 毎週木 II限目10:40-12:10 90分間

二年次 1992.4.17-1993.1.8 隔週金 I.II限目 9:00-12:10 180分間

毎回 スタート時 入り口にて名札をつける 出欠確認

前回ジャーナル（スタッフからのコメント付き）

返却

日程表配布

終了時 12:00 [MY STORY] と題したジャーナルに記入

その週に思った「人関キーワード」も同時記入する

<構成員>

学生：人間関係科19期生 106名

昭和48年(1973)生れ中心、内社会人入学2名

教員スタッフチーム：4名

その（出身領域）と人間関係論への関心視点(当時)

星野欣生 教授：(法学) 行動科学 体験学習法 組織論

木村晴子 教授：(臨床心理学) ユング心理学 箱庭療法 自己分析

まどか庸代 講師：(分子生物学) パラダイム発想法のシステム化

科学と非科学論

市瀬英昭 講師：(カトリック神学) 1991.4-1992.7 祭儀 典礼

中堀仁四郎 教授：(キリスト教神学) 1992.9-1993.1 グループセラピー

家族療法

事務局スタッフ：菅野（専任） 小池（非常勤）

<STAFF MEETING>

2年間で40回のミーティングがもたれた。

本来、研究共同体は、学生教員構成員全体のコンセンサスのもとで行われることが望ましい。しかし、大人数。時間的制限や墓によい方法が見つからないという制限から、4名のスタッフが毎週互いの空き時間を使って2-4時間程のスタッフミーティングをもって、各授業時間の振り返り及び次回の授業プランを立てた。

<STAFF MEETING>記録

No.1 1991.3.20

第1年目初回

<STAFF 各自が提供できること・各人に期待される領域>

星 野：グループ、関係論、スキル、社会、行動科学、組織と人間
木 村：Jung 心理療法、イメージ、無意識、男性女性（性）、日本人論
まどか：科学と人間、いのち、死等へのアプローチ、生命倫理、日本人論、
医者患者関係
市 瀬：神と人、対話、典礼、日常と非日常

<人間関係原論 KEYWORD 連想：

新授業開始にあたり STAFF 達の BRAIN-STORMING>

いまここ、第三世界、アラビア科学、貧富、家族、パワー、教育、リーダー、
リーダーシップ、ひかり、決断、意志決定、瞑想、ひらがな、日本、日本人、
もの、名前、フェジー、男性（性）女性（性）、仕合わせ、悩み、よろこび、
苦痛、苦勞、きく、話す、価値、意味、素、こころ、言語化、たましい、自律、
文化、関係、なれあい、仲間、ことば、自立、自信、はじめ、おわり、別れ、
距離、空間、神、上、出合い、内面化、知恵、知識、記憶、想起、信仰、科学、
援助、確信、思い込み、相互依存、人間、世界、生きがい、自然、通念、常識、
枠組み、規範、上下、いき、感情、表現、葛藤、とき、対決、対話、共生、共
存、世渡り、成長、自己実現、学習、成熟、体験、経験、無意識、影、ペルソ
ナ、夢、組織、集団、儀式、意識、プロセス、観察、みる、コミュニケーション、
共感、ノンバーバル、イメージ、いのち、無、生活（衣食住）・・・

<内容の軸 と 学生の成長の流れ>

内容の軸 と 学生の成長の流れ を 各々人間関係原論の「キーワード」
と「学習過程」の軸と捉えて、学習プランをたてた。

<人間関係科露天風呂説>をこの二年間で展開してみようではないか。

<人間関係原論； 人間関係の哲学探究の試みを体験学習法により学習研究学
生教員共同体が2年間取り組む授業>

<STAFF MEETING>記録

No.23 1992.4.17

第2年目初回

<2年目前期全体のテーマ>

テーマ：つながり

方 法：知的刺激 価値観レベルでの言語化

何故つながりか・・・個性独自性を持ちつつつながる。関わり方の原理の探究
個であり全体である人間関係原論のテーマともいえる。

「つながり」の種類・次元 STAFF BRAIN-STORMING

我とわれわれ	人間（私）と社会	過去－現在－未来
我と汝	人間（私）と自然	人間と機械
東洋と西洋	人間（私）と科学・技術	人間と情報
合理性と不合理性	人間とモノ	不幸と幸福
I と me	人間と神（超越者）	意識と無意識
	人間と宇宙	男性性と女性性
	国と国	統合性
	地域と地域	正常と異常
	出来事と出来事	

<プログラム2年間の骨格>

— 1年入学時期・前期 —

人間関係科コミュニティに入る 内発する 自分や内界につながる
 高校の分野にない新しい視野と人関文化に拡張
 日常生活を意味化・概念化する
 毎週[MY STORY] ジャーナル記入により生
 活プロセス・人間関係原論 Keyword/concept
 2年間記録

体験学習法・学び方を学ぶ 体験学習プログラムによる授業形式
 グループ実習、グループプロセス、コンセンサ
 ス法、学習スタイルのインベントリーなど等。
 (Creative O.D.使用)

「人間関係」論へのチャレンジ 人間関係原論のねらいの実践と探究
 「人間とは、・・・
 生きるとは・・・
 愛とは・・・
 私は・・・」
 [MY STORY] の key words をヒントとして
 自答

— 1年後期 —

「人間関係科」論 「人間関係科ニんカンコミュニティを探索する」
 科の人間中心性教育システムとは何か
 科の価値観に触れ、意識化言語化する試み
 プロジェクトチームによる研究と発表

— 2 年前期 —	
関係論への気づきと築き	年間テーマ「つながり」 講義・討議・読書・研究等知的刺激を通す ものの見方／枠組み／パラダイム／価値観／コ ンセンサス
— 2 年後期 —	
体験を論理化する 人間・関係の原論	つながりの実践行動 から 哲学や概念化へ 「つながりの中味」に迫る 「つながり」とは（概念化） 価値観レベルでの言語化 「関係」の本質を探究する
— 2 年卒業時期 —	
人間関係科コミュニティと切れる	社会・外界とつながる 学びのイメージづくり 学びのつながり つながりの自己実現 つながりを創り出す

<プログラム作成のポイント＝学生の成長の流れ>

高校の分野にない内界

1 年前期。 高校から人間関係科へ入るための橋渡し期

PERSONAL HISTORY

1 年後期。 知り合う

外界・社会との関わり・つながり

2 年前期。 関係の概念化

2 年後期。 二年間のSTORY

最後に「私の人間論」冊子となるようなクラス

1 年・2 年を通して、毎授業後 MY JOURNAL (MY STORY と題す) 記入

人間関係原論の KEY WORDS を毎回記載し、それをヒントに自分なりの
STORY を学年末毎に書き言語化・意味化する。

自分史、自己の体験の意識化・意味化をもたらすことは、物語りや歴史性によ
ってプロセス重視の学術的手法である。

＜やり遂げられなかったこと：課題＞

1991・1992年度人間関係原論 Staff Team として＞

- 1。「つながりの中味」の概念化を学生と時間的内容的に充分取り組むための
実習プログラムづくり（2年間では短い）
- 2。スタッフ同志の「人間関係論」への学際的取り組み
STAFF MEETING は次回の授業打ち合わせがやっと取れるタイムスケジュール
というものが現状で、教員同志の研究討議時間の確保が実現されていない。
- 3。学生との「人間関係原論」授業の計画
STAFF MEETING は常に教員のみで、学生とのスタッフワークは行わ
なかった。

＜やり終えたこと：成果＞

1991・1992年度人間関係原論 Learning Communityとして＞

- 1。体験学習法によるチームワーク、
それを通しての「百人皆と知り合えた」というコミュニティの実感
- 2。学び方を学ぶ
体験学習の論理、組織開発(CREATIVE O.D.)プログラムの一部紹介
コンセンサス法 価値観
- 3。「人間関係」論と「人間関係科」論による
人間関係原論及び自分史論・人間論
- 4。2年間の学びと研究成果： “
My story（毎回毎）／My history（每期毎）による
自分史論からの人間論、人間関係観の言語化
- 5。つなげる力（実践性）とつながりをみる力（論理性）
- 6。体験学習法のめざす change agent の実践的自信

毎回の授業でのグループと自分との実習ワークを繰り返す中で、実践的に「私が変わりグループが変わる、グループが変わり私が変わる」即ち、「グループが生き私が生きる、グループが成長し私が成長する」ことを経験していく。

関わりの中で、change agent（社会変革子）としての自分達人間の自覚や自信が実践的に生まれる。

EIAHE' サイクルを意識した体験学習法は、自己の体験や内発的な自己の思いという体験(E)から考察過程を経て次の行動体験(E')へのチャレンジを繰り返す。これは学習共同体という人間社会の中で、人間関係そのもののもつ創造性に出合ったり、期待できる力、人や人間や関わりを愛し愛される実感を、百人というコミュニティのなかで展開する学習法である。

人間関係の原論は単に理論を一人の人間の中で展開するのではない。スタッフは学際的チームとして複数の領域の複合を試みつつ、又、人間としてスタッフ同志がチームティーチングという教員のチームワークを通して、互いの価値観に気づき、知り合いつつ2年間を過ごす。

学生との大人数の時間の中で「個人も活かされ、全体も活かされる」ホロンとしての人間・人間関係のダイナミズムが人間関係の基礎論原理を創り出している。その生の人間論原論を描き記述するステップが、人間関係科という学生教職員による学習研究共同体の「人間関係論」の研究成果といえよう。

自分の体験という実践や実生活を意識化することがそのまま「体験学習法による人間関係論」を修得したという実績は、自らの人生を個として（私として）他者や全体との関わりの中で生きていく自信につながることを期待して各人と卒業期に別れる。2年間の学習共同体の解散をむかえる。

一方、集団の当然の現象として、2年間集団活動に疲れ、恒に informal（仲良し）グループに留まった少数の人々もいる。体験的学習の時間よりも小講義などの知的情報修得の時間により反応し満足しやすい傾向を示す人もいた。

しかし、全体性やコミュニティ性の強い授業にることによって、各人が全体との関係の中で自分や影響関係に気づきつつ、「人間関係」のダイナミズムを経験していた。

グループの中で生かされる自分とグループゆえに生かされない自分を、様々な形で経験していく機会を2年間数多くもったことは、人々との関わりの中で生活していく自信につながっていることだろう。

資料 1

人間関係原論 1
19期生
1991. 4. 11.

人間関係原論ならい

- * 人間は.....
- * 生きることは.....
- * 愛は.....
- * 私は.....
- *
- *
- *

このようなことにとりくむ（実践と探求をくり返す）

[Memo]

担当者 星野・木村・市瀬・まどか

資料 2

人間関係原論19期生
年 月 日
No. ()

May 2019

今回のキー・ワード

学生番号 _____ 氏名 _____

資料 3

人間関係原論 1 9 期生 1991年4月～1992年1月 星野、木村
プログラムの実際 市瀬、まどか

全体のねらい *人間は…… *生きることは…… *愛は…… *私は……
このようなことにとりくむ(実践と探求をくり返す)

- 4/11 スタッフ紹介 ねらいの提示 全体の枠組み
- 4/18 ねらい・お互いに知合うきっかけをつくる
実習「フォースド・チョイス」 小講義「実習の意味をめぐって」
- 4/25 ねらい・スタッフの関心事に触れ、イメージの活性化をはかる
スタッフの小講義 まどか「いいいも」 市瀬「キリスト教と日本人」 星「心の整理」 野「人間ファクシマ」
- 5/2 ねらい・自分たちの関心事を明らかにし、共有化する(1)
ブレインストーミング「私の関心事」
- 5/9 ねらい・ 同上(2)
「私たちの関心事」発表
- 5/16 ねらい・キーワードを手がかりにテーマをさぐる(1)
グループビンゴ キーワードを個人で書き出し、グループでわちあい追加する
- 5/23 ねらい・ 同上(2)
グループでキーワードをしぼる(コンセンサス法で)
- 5/30 ねらい・ 同上(3)。ここでの学方の特徴を知る(1)
グループ発表「キーワードをしぼったら」実習「学習スタイルのインベントリー」
- 6/6 ねらい・ここでの学び方の特徴を知る(2)
小講義「さまざまな学び方をめぐって」 テーマ選び(投票)
- 6/13, 27, 7/4 リサーチ・アワー
ねらい・日常生活を意味化してみる。グループ・プロセスから学ぶ
グループ分け(18グループ)。研究方法などの説明。リサーチにはいる。
- 7/11, 18 発表
前期レポート課題提示

資料 4

- 9/26 ねらい・コミュニティづくりをめざして
実習「私の旗づくり」テーマ・夏休みの私
- 10/3 ねらい・人間コミュニティを探索する(1)
後期の流れの説明。関心領域、グループテーマの決定。31グループ
- 10/17 ねらい・同上(2)
日程、すすめ方の説明。研究活動上の諸注意。 グループの研究活動開始
- 10/7, 31, 11/7 研究活動
- 11/21, 28 ねらい・人間コミュニティを探索する(3)
各グループでつくった冊子(研究レポート)の配布、発表、わちあい
- 12/5 ねらい・人間コミュニティを探索する(まとめ)
調査活動へのコメント—調査法、レポートのまとめ方、報告の仕方など
- 12/12 ねらい・人間コミュニティを探索する—概念化の試み(スタッフより)—
講義 市瀬「自分についていくこと」 まどか「私の心から21歳」 市瀬「生きる意味を再考する」 野「心」
- 12/19 ねらい・同上(2)
講義 星「人間の位置と記号」 市瀬「心から」 野「メモリーマシンの進化」 人間関係のゆらぎ
- 1/9, 16, 23 ねらい・人間での自分の位置を確かめる—My Story から My Historyへ—
「My Storyの整理と年表作り」
(1/16) 後期レポート課題提示

資料 5

人間関係原論Ⅰ

「人間を探索する」 プロジェクト

注：1年生後期に実施した
研究プロジェクトのテーマと
メンバーである

【テーマ】

人間の歴史

- ◆人間で得たもの
- ◆人間で得たもの（卒業生にききたい）
- ◆人間に入って卒業生はどう変わったか
- ◆将来どう役立つか
- ◆人間卒業生の“いま”
- ◆卒業生の今
- ◆卒業生のいま

他との比較

- ▼他大学の人間について
- ▼他の人間について
- ▼他の人間はどうしているの？
- ▼他大学の人間関係科ではどんなことを学んでいるか
- ▼心理学科との違いは？
- ▼聖霊短大生活科人間関係科を探る

なぜ理解・わかりにくいのか
現在社会に受け入れにくいのか

- ◆英語科は人間関係科をどうみているのか
- ◆高校の進路指導の先生方は人間をどう思っているのか？
- ◆高校の先生方は人間をどう思っているのか？
- ◆高校の先生方は人間関係科をどう思っているのか？
- ◆高校の先生は人間をどういう科だと思っているか
- ◆人間の評判
- ◆私達のおもう人間と他からみた人間のちがいは
- ◆社会に於ける人間生の印象
- ◆人間生をもつ家族の気持ち

【チームメンバー】

- 三浦、三宅、丹羽、坂本
- 稲垣、岩田、三橋、塚原
- 加藤（美）、前崎、笹田、志村
- 河出、久保田、野末、酒井（智）、柳原
- 木原、鬼頭、佐藤（菜）、桜井（孝）
- 細井、水谷、小野、高橋
- 宮村、長瀬、佐々木
- 犬塚、曾我野、高木（慶）
- 会田、東出、樋口
- 船橋、井野
- 五味、花木、長谷川、柴山
- 佐治、鈴木、田中（ひ）、鶴飼
- 加藤（芳）、河村、松山、竹内
- 平下、小寺、熊沢、田頭
- 阿部、伊藤、奥森
- 西尾、野口、若杉
- 平野、栗田、太田
- 足立、加藤（あ）、河内
- 大前、柴田、梅園、脇野
- 中島、清水、高柳、田中（友）
- 桑田、久野、斎藤、酒井（奈）
- 西野、高木（香）、恒川（さ）、津野

資料 6

人間関係原論Ⅰ
1991.10.24

「人間を探索する」 プロジェクト

【テーマ】

【チームメンバー】

人間の先生

- ◆先生を知って人間を知ろう 安立、会沢、松本（美）、佐藤（恵）、四宮
- ◆どうして人間の先生になったか 松田、齋本
- ◆先生は学生にどうなってほしいと思っているか 金、熊

人間のカリキュラム

- ◆フィールドワーク ～フィールド先がなぜ養護学校なのか？～ 藤永、白木、恒川（美）、上田
- ◆合宿について 藤森、伊神、曾根田
- ◆人間の在学生の気持 石田、池田
- ◆人間はなにをしているのか（どう答えたらよいか） 松本（道）、野村、植木
- ◆人間関係科で何を学びたいかを高校生に聞く 桜井（比）、桜井（裕）
- ◆人間ではなぜ資格がとれないのか 伴、石川、兼子、中村

● 研究成果の発表について

- ・今回は、口頭発表を行わず、各グループ毎に小冊子をつくります。その小冊子を集めて、各自が、冊子をつくります。
- ・小冊子の構成は、表紙、研究内容、プロセスの記述とし、それぞれ別建てとします。表紙は、決められたもの（よく似た内容のものを同じ色にする）をつけます。11月7日にわたします。このテーマとチームメンバー表では、こちらで、よく似たものをおまかに分けてみました（テーマにつけた印参照）。意見や希望があれば教えて下さい。
- ・印刷は、片面刷りで、120部つくります。綴じが穴はあけないで下さい。期日が迫ってくると、混雑するので、早目にするのがよいと思います。

資料 7

人間関係原論Ⅱ 19期生 1992年4月～1992年7月 星野、木村
市瀬、まどか
プログラムの実際

全体のねらい *人間は—— *生きることは—— *愛は—— *私は——
このようなことにとりくむ(実践と探求をくり返す)

- 4/17 ねらい・人間関係科2年次の入り口で——
実習「21世紀に生きる」 学びのイメージづくり(学習地図づくり)
- 5/1 ねらい・つながりのさまざまな姿に気づく(1)
小講義「つなぐつなぐ」 野、まどか 実習「つながりを考えてみたいもの」 プレスト
発表
- 5/8 ねらい・同上(2)
グループ作業「新聞、雑誌の記事の中に“つながり”を探す。 発表
- 5/22 ねらい・ 同上(まとめ)
わかちあい「もの見方、価値観」等をめぐって 一覧表づくり
小講義 野「つなぐつなぐ——つなぐの野—— 小論文作成
- 6/5 ねらい・ “つなぐこと”のベースにある価値観に気づく
実習「黄金のまり」(コンセンサスで)
- 6/26 ねらい・これまでの私の“つながり”を明確化する
実習「関係図づくり」
- 7/10 ねらい・どのような“つながり方”があるのかを明確にする
つながり方を探る グループ作業、発表。スタッフのひとこと。
夏休みの課題提示

人間関係原論Ⅱ 19期生 1992年10月～1993年1月 中堀、星野
木村、まどか

- 10/9 ねらい・ “つながり”の中味を探る(1)
夏休みに経験したことを“つながり”の視点から意識化する
個人作業「私のつながりマップづくり」 グループ作業
- 10/23 ねらい・ 同上(2)
グループ作業：表札の再制作・ラベルづくり。マップづくり
個人作業：レポート作成

資料 8

11/27 ねらい・ “つながり”の視点を広げてみる
小講義 野「つなぐつなぐ」 まどか「つなぐつなぐ」 野「つなぐつなぐ」

12/11 ねらい・ 同上 まどめ
小講義 野「つなぐつなぐ」というマッピング
映画「隣りのトトロ」

1/8 ねらい・ 2年間の学びをつなげ、形にする—卒業にむけて(1)—
最終レポートの提示

資料 9

注：全体の授業終了時に学生に課したものである

人間関係原論Ⅱ
19期生
1993.1.8.

人間関係原論Ⅱ 最終レポート課題

2年間の学びをつなげ、形にするために……
「私の人間論」冊子をつくる

題名はオリジナルのものをつけてください

意味をさぐるための

人間とは……、愛とは……、生きるとは……など、原論Ⅰの最初
に提示したテーマに自分なりにこたえること

形、構成は自由。物語、実録、論文スタイルなど、いろいろ工夫して下
さい。

今までの経験や、得たこと、考えたことをデータとする。

他の授業で得たこととの関連づけもする

そのためにまず 2年目の“My History”年表を作る
(昨年ものを参考にしながら)

資料に参考にするのは

1年目の“My History”

2年目の“My History”

2年間の毎回のMy Story

授業で作ったもの、書いたもの、いろいろ

たとえば……

[レポート] 3か月半人間関係科で生きてみて(1年7月)
1年目の“MY HISTORY”年表とレポート
小論文(2年5月22日)
つながりレポート(2年10月23日)

資料 10

[作ったもの] たとえば……

キー・ワードをめぐるものいろいろ

人間探索集

学びのイメージ作り

関係図

つながりマップ など、いろいろ。

[小講義] 主なものを参考までに……

91.4/18 *実習の意味をめぐって

4/25 *いき に いきる(まどか) *キリスト教と日本人(市瀬)

*心の世界(木村) *人間、ファジー、体験学習(星野)

5/10 *キー・ワードについて(木村)

6/6 *プロセスから学ぶ(星野) *学ぶための「粹」(木村)

内からと外からと(まどか) *読書からの学び(市瀬)

12/5 *コメント

キー・ワードをめぐるって 調査法について

レポートのまとめかた 報告のしかた

12/12 *自分になっていくこと(市瀬)

12/19 *人間教育の位置づけと自己実現(木村)

*ラボラトリー・メソッドの現代性(星野)

92.5/1 つながりをめぐって(星野・まどか)

5/22 つながりの心理学(木村)

11/27 つながりと4つの窓(星野)

つなげる目(まどか)

儀式……切るために(木村)

12/11 つながりというテーマを与えられて(中編)

*用紙……自由 My Historyの年表など、資料もいれること

*枚数……自由

*装丁……自由。工夫してください

*提出期限…… 1月29日(金) 人間事務室提出箱へ

原論 スタッフよりのメッセージ

注：全部の授業終了後、卒業式の日(3月18日)に学生に配布したものである

「人間関係原論」の2年間は、私にとって、とても長い2年間でした。あなた達と同じように、山あり谷ありで、行き詰まったこともしばしばでした。

でも、この2年間でふりかえてみますと、スケジュールの上のタテの“つながり”だけでなく、縦横無尽にたくさんの方が“つながって”いたように思います。この授業は「私の関心事」から始まりましたが、それは仲間の感心事でもあり、「人間関係科のこと」については、それこそ、人間生としての今のあなたや私の行動態度の中に20年の歴史の一コマ一コマが何かの形で(意識されなくとも)“つながり”、刻まれていることを知りました。先輩達の投げかけたさまざまなことが、“つながり”、一つの形をなして人間関係科ができてきたのです。その息吹が、直接間接に、今の私達に投げかけているものがいっぱいあり、その中に私達は生かされていると言ってもよいでしょう。“つながり”の輪は、家族から社会全体にまで、拡大してみることができます。“つながり”、それは何でもない日常よく使う言葉ですが、今、自分がここにいるということは、目に見えたり見えなかったりする無数の“つながり”の存在を証明することに他ならないことです。私が今ここにあるということは、無数の“つながり”の証でしょう。そして、“つながれている”のも私ですが、“つなぐ”のも私です。“つながれている”自分に気づくこと、そのことは、正に“つなぐ”(つなごうとする)自分にも“つながって”いくことでしょう。“つないだり”、“つながれたり”、何かゲームのようですが、人が生きていくということ、そのようなことではないでしょうか。“つながっている”糸のはしほしに、キラリと光る露のようなもの(それは生まれたり消えたりするものですが)、その光に照らされてゆっくりと歩いていきたいものです。

1993. 3. 8

星野欣生

途中から参加した原論Ⅱを終わるにあたり

中堀仁四郎

「教師が提示を始めても、学生は私語をやめない。あちこちを向いて座っている。集中力があるのだろうか？。作業をしはじめたようだ。でも、やっているようで他の事をしている者もいる。なかなかスタートしない。教師はそれでも淡々と、提示をつづける。やがて学生はながらではあるがことを始める。

学生はそれなりに楽しんでやっているのかな？。

このようにまかせることで自主的になるのかな？

私はこのような時間の使い方は性に合わない。時間が惜しいと思う。これが教育というならば、私は教育に向かないのかもしれない。これが教育といえるのかな？ 駆けの必要な段階ではないのかな？。そういえば幼稚園ではこのことをやりながら興味を持つ子に集中力をつけていく。……」

以上は1992年10月23日の授業で記録を取っていた私の書いた感想メモの一部である。今でもこのような思いは持っている。しかしこの事はまた私に教育とは何か？どのようすめられるべきか、を考えさせてくれている。

最終の提出物、充分に自分が納得がいくように作品を作っているように見える人もいる。1、2枚で、私から見れば、ヤツケ仕事のように見えるものもある。しかし、誰もが自分のやったことから、それなりのものを得るのだと今は思っている。

中堀仁四郎 '93/3/10

19期生の皆さん、全員卒業おめでとうございます。

皆さんの原論Ⅱレポート(Or作品)、全部読ませていただきました。(コメントは出来ませんが毎回必ず読むようにしてきました。原論Ⅰ、Ⅱが終わった今、106人ひとりひとりの2年間を想うときさまざまな感慨が行き来します。もちろん、内容をすべて覚えているわけはありませんが、毎回読んでみると、それなりに私のイメージの中で続いている感じがあります。

19期生全員がつながった“星座”が私の中に出来ているといえるようです。最後に提出されたものにはいろいろなものがありました。2年間の出来ごとや気持ち、考えたことをていねいにまとめあげたもの、創作もの、葦丁に凝ったもの……大作もあればほんの短いもので。それぞれから各人の“人間”についての気持ちが伝わってきます。出来の良し悪しを評価しないでいいのは人間のいいところですね。2年間の“私”がこれなのだ各自が自分の中に引き戻していただければ良いと思っています。

授業の中で皆さんに伝えたいことはお話ししたのでここでは改めて書きません。ただ、人にはそれぞれにふさわしい道が、その都度目の前に見えてくるものだと感じています。(私も含めて)人間との出会いもそのひとつだといえるでしょう。無理をせず、しかしチャンスを探むときには勇敢に…… ちゃんと“卒業”したら、また会いましょう。

1993年3月 木村晴子

言われたことをする、という風潮はいつのまにか身につけやすいし、多くの社会、会社組織で「あの子は言われたことしかしない」と評されることもあるでしょう。

言われたことしかしない方が殆どの場合案ですし、安全でもあります。言われたことはしない、出来ないということもあるでしょうが……

ところで、原論レポートを拝見していると、スタッフから言われたことをきっかけに言われなかったことを手懸けた色々ユニークなものを目にしました。

外から課題や要望として言われたことを通して「人の思い」を把握し、それと接点をもちつつ、独自の内からの声「言っていること」を実現させたであろうレポート作品達に、私は「創造性」感じ、ありがたく思いました。

愛は、思いだけでなくかたちにしていってプロセスです。そして笑りというプレゼントです。

今まで様々な機会を捉えたレポート参加ありがとうございました。外から言われたことだけでなく、自分の内から言われたことにも大切に全身(耳や目や心)を傾け、手で形にしていってください。

それがあなたの唯一の人生という作品なのでしょうから。

木村晴子
人間の原論Ⅰ・Ⅱ
まだか磨代
1993. 2. 14